

女子教育への提言

女子大学興国論

難波紋吉

私は神戸女学院長として、また大学長として、十二年間にわたる女子高等教育、特に女子大学教育に従事した経験をもっている。

かつて、女子大学論が、ジャーナリズムによってとりあげられ、女子大学教育の是非やその価値が論議されたことがある。そのとき、私はこれらの論議が余りにも抽象論であり、現実から遊離した愚論であることに一驚を喫し、その認識不足を嘆かざるを得なかった。そして、私はこのような女子大学亡国論の主張者自らこそ、まさしく亡国の人物ではないか、とさえ感じたのである。正直にいつて、女子大学亡国論は、針の穴からのぞいた教育論であり、世界社会の進展と逆行するもののように思われた。従つて、私は女子大学の問題をとりあげる場合、現代における女子の旺盛な教育的意欲、女子大学の現実の姿、そして世界社会の動態的観点との関連性を忘れるならば、それは無意味ではないかと考えるのである。

先ず第一に、女子は世界人口の半数を占めている事実を再確認すべきである。第二に、すべての女子は、例外的な場合は別として、

結婚を希望し、幸福な家庭生活の実現を望んでいる。第三に、多くの女子は子供を生み、母としてよい子供を育てることに、感激と誇りを持っている。

現在の家庭生活の主筆者が夫であるが、妻であるかの問題はとにかくとして、近代社会における最初の教育やしつけが、家庭を場として、妻の手によって行われていることは、普遍的事実である。いわば、妻は、夫のよき内助者であると同時に、子供のよき教師たるべき任務を課せられているのである。この二つの重要な任務の実践が、妻の教育の有無やその高低と緊密な関係を有することは論ずるまでもなく明らかであると思う。ここに女子大学や共学大学が年々増加し、入学志望者が飛躍的に増大している一つの理由がある、と考えられる。

去る三月三十一日付の新聞紙上で発表された『家庭生活問題審議会』の中間答申のなかに『家庭生活は人間関係の基本的なものを勉強する最初の学校である。個人の生涯で一番最初に出合う先生は母親であり父親である』と述べられている。ところで、この二人の教師のうち、子供が幼時時代から、日常的に、最も緊密にして頻繁な交渉関係を持ち、意識的・無意識的に多くのことを教えられ、また学ぶのは母からである。従つて教師としての母の資格、すなわち、その教育程度や人格的修養及び見識等は、その子供にとって無限の重要性を持つことになる。母が中学出身であるか大学出であるかによって、教師としての母のあり方が、かなり異なるものになるであらうことは、いうまでもない。

男女平等が強調され、民主社会の実現が重要な課題となっている

現代において、女子教育の向上、とりわけ女子大学教育の普及が、どのように貢献するものであるかは、以上のことから考えて見ても自明であると思う。ここで付言したいことは、米国の初等教育に従事する教師の約八五パーセントが婦人であり、米国民民主義を支えている力として、婦人の高等教育が高く評価されているという事実についてである。

このような観点から、私は女子大学教育の礼讃者である。

(校友・元神戸女子学院院長)

女子大はこれでいいのか

片山 春 一

「私は大学では、うんと勉強したいから、共学の大学にしたいと思うがどうでしょう」こんな相談をよくうける。「学問するには生ぬるい世界」という風に世間は女子大を見ていないだろうか。近年、「女子学生亡国論」という暴論が飛び出したりして世間をにぎわした。かれこれ考え合わせてみて、私は女子大学が現代において占める存在の意義を深く反省する必要があるのではないらね。女子教育といっても、日本文学科、英米文学科などの女子学生との接触以外の経験を持たないので、共学における女子学生一般については同志社大学在任当時の経験を思い起すはかない。文学部だけの単科女子大学の首脳者として、私は文学による人間づくりということにな

ると、これは女子大学ならではのがあるかと信じている。文学も学問である以上、他の学問と同じく、科学的な研究が必要である。語学的研究、作品、時代、作家の経歴、その他いろいろの資料の回収、分析、綜合等による基礎研究の必要なことはもちろんである。ところが文学というものは血の通う生き物なのだ。部分的な切開手術はやむを得ないとしても生体解剖により生命を絶つことは許されない。文学は組板にのせて研究するのではなく、まるっばで感じ取るのではないと物にならぬ。しっかり文学を味わうことにより、初めてあらゆる型の人間を発見する。自分という人間を深く見きわめ味わい、やがて真の自分を発見する。男女同権だ、自由だの自治だの主体性だのと今の学生は熱病患者のように叫んでは自らのしんでいる者もあるが、人間の分在、女性としての人間の生き方を教えてくれるのは文学だと私は言いたい。ところで、文学研究ということがこうしたものだとしても、共学大学においての文学研究だって全く同一で、女子大でないと、そうした研究はできないとは言えない、と反問するだろう。しかし全くその通りと私は答えたい。しかし今日の共学においては、あらゆる種類の学問研究が、卒業後の就職に役立つものという意識とあまりにも深くつながるを得ない。女子大学の教学とても決して卒業後の就職と無関心ではあり得ないが、ここでは、もっと純粹に文学に沈潜し、いわゆる教養としての文学をかみしめて味わい身につけることが、やり易いものではあるまいか。私はいささか我田引水式の、また文学という一面的な問題を取り上げて私見を述べたが、女子大には女子大の使命と存在理由のあることを、他の問題をも取上げて別の機会に述べてみたい。

マンモス共学大学よりも、多くの女子大学は小規模で少数の学生と教師と個人接触のきき易いことも、すぐれた特徴として挙げられるだろう。にもかかわらず、女子大学はこれだいいのか、深く反省する時機に來ていると思う。

(校友・梅花女子大学学長)

女子教育すなわち情操教育

山田基男

同志社神学部を昭和七年に卒えた頃は将来女子教育に献身するなどとは夢にも思っていなかった。それが戦時中大陸伝道に志し、北京の聖者清水安三先生（同志社予科時代の恩師）の崇貞学園で中国の姑娘たちの教育に携ったのがきっかけとなり、戦後は河井道女史の恵泉女学園の短大で教鞭をとり、更に女史の推薦で札幌の北星女学校の短大創設の重任を負われ、それが一段落した頃、恩師難波紋吉院長の招きで神戸女学院のチャプレンに就任、また導かれて、今日、山梨英和で甲州の女性文化の向上のお手伝いをするなど、女子教育に生涯をささげることになった次第。このたび母校から女子教育について何か書けともとめられ光栄に思うとともに、顧みて感慨の深いものがある。

さて、女子教育への提言をと迫られても、ただ無我夢中で教育に当っただけで独特の教育大系があるわけでもないで、果してこ参

考になるかどうか。教育原理であれば、母校には同期生の志賀英雄教授が、小生同様光頭を輝かせての名講義で女子学生の人気の的というから聞かせて貰いたいものである。

私の経験によれば女子教育はすなわち情操教育と考えてよいと思う。情操豊かな女性を育てることが女子教育最大の目標であると考え私は思っている。神戸女学院大学で精神医学を講じておられる畏友神谷美恵子博士は「元來、人格というものは、人間の精神を構成する知情意のうち、主として感情と意志から成り立っているものと考えられている。私自身もまた、デリケートな情操、正しく強い意志というものを大切に考え、そのように女学院でも講義して来たつもりである」と述べておられるが全く同感である。もともと教育が高い知性を目指すことは申すまでもないことであるが、将来家庭を守る女性をつくる教育では、特に美しい情操をやしなうこと、強い意志の力をきたえることが大切ではなからうか。

それではどうすればよいか。情操教育には先ず教育環境が必要である。美しい人は美しい環境から生まれる。美しい校庭、清楚な校舎なくして美しいひとは育たない。そこで私は先ず校舎内外の清潔整頓に気を配り、学生生徒の協力をもとめている。これは簡単なことのように至難の業で、これに成功すれば女子教育の大半は成功だと私は思っている。美しい女学校は必ずよい女学校、汚い女学校は必ずわるい女学校ときまつている。それに歌声の聞える女学校はよい女学校であることをもつけ加えておきたい。

次に我慢強い、根気のある女性を育てる秘訣は欠席遅刻をきびしく戒める以外に良案はない。縁談の際は成績ばかりに気をとられず

在学中の出席状況を調べるのが賢い方法で、皆勤賞を貰った娘は母となる資格充分と私は推薦する。経験に基いた女子教育論をちよつぱり。妄言多謝。

(校友・山梨英和学院院長)

キリスト教主義と教育方針

二 宮 源 兵

キリスト教主義学校の教育方針

(一) 一貫教育。キリスト教主義学校の教育は、一般に幼、小、中、高、大の一貫が出来れば最も願わしいことである。しかし、この一貫教育は、各学校が学生生徒の大量教育を余儀なくされている今日では、これが理想的に運営されることはむづかしいことである。中高、大(短大)くらいの規模の学校で、学生生徒が二、三千名くらいの学校においては、この一貫教育が比較的行ないやすい。松山東雲学園には、中、高、短大を合せて約三千名の学生生徒がいるが、中学卒業生は全部高校へ、高校卒業生でホーム担任の推薦者は全部短大へ入学出来るような仕組みになっている。従つて、当学園では進学の問題に関する限り一貫教育が全うされている。

(二) 各学校独自のカリキュラム。特に、キリスト教主義の学校では特に中、高校のカリキュラムは、各校がキリスト教主義学校としての魅力あるカリキュラムを作成することが必要であり、このことはまた同時に各高校を生かす道ともなると信ずる。旧い伝統を有し設

備の完備している大都會の諸学校は問題外として、地方の中、高校において、このような問題が痛切に考えられる。特に、キリスト教主義中学校が地方においてだんだん衰微して行くのは、各中学校が設備の充実した授業料の易い公立中学校の後塵を受けるような教育をしているためではあるまいか。私たちの学園においては、将来、中、高を六年制にして高一―高六の段階にし、高三修了者には、中学の卒業証書を渡すような一貫教育からはじめて、何か公立学校と異つた特色を出すよう研究中である。

キリスト教主義学校における女子教育の目標

各高校には校訓があつて、これらの校訓を遵守し実践し得るような女性をつくり出すことを目標とすることはいうまでもない。私の学園にも五つの校訓があるが、これらの校訓を身につけると同時にさらに次の三つことがらが実践出来るような女性となることを督励している。

それは、「かしこい、やさしい、気の利く女性になれ」ということである。「かしこい」ということは、専門的知識を身につけるといふことのうえに、叡智のはたらく、事に當つて正しい判断が出来ることを意味する。「やさしい」ということは、愛情に満ち、理解と寛容とをもつて他人に對することが出来ることを意味する。「気が利く」ということは、なさなければならぬことに對して、ためらうことなく実行し、事ごとに間に合う行為を実行することを意味する。「母の典型」といわれるアウグスティヌスの母モニカの伝記を読むと、これら三つの女子教育の目標がはつきりするされている。

(校友・松山東雲学園長)